

報 告

英語学習における口語英語の導入について

八尋 春海* デニス・ウールブライト**

〈要 旨〉

文部科学省は、高等学校の英語教育においてコミュニケーション能力を重視する方針を打ち出している。当然、学校現場でもそれに従った教育を行うよう努力をしている。しかしながら、高等学校の英語教科書や大学入学試験の内容を分析してみると、そこには口語英語はほとんど含まれていないということが分かる。その結果高等学校では、英語母語話者が日常的に使用している口語英語を学ばないままとなっているのが現状である。

大学に入学した学生たちは、海外に滞在する機会が飛躍的に増える。その際、口語英語を事前に学んでいれば、海外での滞在生活もスムーズに行うことができるはずである。そこで、入学直後の英語の授業において、口語英語を体系的に学ぶ機会が確保できれば理想的であると言える。

キーワード：英語教育、口語英語、語彙、コミュニケーション、高等学校

1. はじめに

初めて英語圏の国を訪問する大学生は、これまで学んできた英語語彙にはなかった語彙が日常の場面に存在することに戸惑うことがよくある。ここで初めて「口語英語」というものを知るのである。

『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』には、「中学校や高等学校で学ぶ基本的な語や連語などの中で、英語を母語とする人々が日常生活においてよく用いる表現や、海外で生活する際に必要となると考えられる表現を扱う」と書かれているが、「英語を母語とする人々が日常生活においてよく用いる表現」の中でも、口語については学校現場ではほとんど取り扱われていないのが現状である。小林敏彦(2009)は、「(口語と文語の)区別が学習者にも教える側にもしっかりと整理されていなければ、その使用者に対して無教養、粗野、下品、武骨、無礼などと無知に基づく偏見が生まれる」と指摘し、口語英語の指導の必要性を訴えている。小林は、その現状について、「口語のさまざまな物理的、心理的、社会的特徴は口語の語彙、語用、文法、談話構造に特色を与えることになり、教

室で教えられる従来の文法規則では非文法的または例外的な形態として扱われ、系統だった説明がされないことが多い」とも述べている。つまり、口語は学校現場では現状ではアウトサイダー的な見方しかされていないのである。

本論では、口語英語の語彙指導について、高等学校から大学に至る期間に焦点を当てて検討を行うことにする。高等学校から大学に至る期間に焦点を当てるのは、大学入学直後から外国に滞在する可能性が飛躍的に高まり、実際に母語話者の話す英語に接する機会が増加するからである。

池田拓朗(1992)は、英語の文体を表現の媒体と洗練性の度合いによって5つ(洗練文語体、一般文語体、洗練口語体、一般口語体、卑俗体)に分類している。本論で取り上げる「口語英語」とは、このうちの「一般口語体」と「卑俗体」をあわせたものとする。池田の分類する「一般口語体」とは、堅苦しくないが、くだけ過ぎてもいないもので、地方方言、スラング、語法違反も散発的に見られるものである。「卑俗体」とは、書き言葉はほとんどなく、スラングのみならず、隠語も愛用され、文法も無視されるものである。

* 西南女学院大学人文学部観光文化学科 教授

** 西南女学院大学人文学部英語学科 教授

2. 高等学校英語教科書

2009年に公示された高等学校の学習指導要領は、コミュニケーション能力重視の英語教育を求めている。そして、小学校から高等学校まで、程度の差こそあれコミュニケーション能力に重点を置いた英語教育が行われている。確かに、研修や留学などの機会を利用して外国に滞在する場合には、日々の生活においてコミュニケーション能力は重要なものとなる。しかしながら、斉藤兆史(2009)は学習指導要領のさまざまな問題点を指摘し、「学習指導要領が定める指導内容を教えることはきわめて困難」と結論づけている。文部科学省が目標とするレベルに到達するための環境が整っていないのである。そもそもそれ以前に、斉藤が指摘するように、学習指導要領で言う「コミュニケーション能力」という考え方自体に大きな欠陥を抱えているのが根本的な問題である。

また、現地での「コミュニケーション能力」とは、日本の英語教科書に出ているハンバーガーショップで買い物ができるといった生易しいものではない。1992年にアメリカで日本人留学生の服部剛丈君が銃で殺害された時に、彼がもし“Feeze”という言葉が理解できていれば、命をとりとめたのかもしれない。銃の所持や使用についての抵抗感が極めて低いアメリカにおいては、それに関連する語彙を知らないでいると命に関わる事態も生じるのである。

このような現状の問題を念頭に置きつつ、高等学校の英語教科書の語彙について口語英語の視点から見ていくことにする。川又正之(2012)は、「実質的にはどの出版社のどの教科書を使用するかによって、生徒たちが遭遇する語彙が大きく異なっている」とデータ分析をもとに結論づけているが、たとえ多くの語彙を収録したとしても高等学校の英語教科書には限界がある。高梨芳郎(2009)によれば「母語話者の語彙が2万語弱」で、これに対して高等学校までに学ぶ英語の語彙数はこのおおよそ2割以下である。母語話者のレベルに達するにはとても十分とは言えない。この語彙数を見ただけでも、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」という文部科学省が求める目標がいかにも理不尽であるかがよく分かる。佐藤学(2009)は、文部科学省の求めていることと実態を比較して、いかにこの目標が無理で必要のないことなのかを訴えている。

永原和夫(1991)や中條清美他(2007)は、高等学校の英語教科書のデータを分析して語彙の調査を行っ

ているが、いずれも計数分析を中心にしたものである。膨大な語彙についてのデータはあるが、その語が口語的な意味で使用されているかどうかも含めてコンテキストを見ることができないため、本論で参考にすることは難しい。

では、量ではなく、質の面から見て、高等学校の英語教科書の語彙は、どうであろうか。中條清美他(2008)は、2006年度に使用されている高等学校英語教科書の語彙の「実用性」について、低い評価をしている。長谷川修治他(2008)も2006年度に使用されている中学校英語教科書と高等学校英語教科書の語彙について「実践的コミュニケーション能力」という点で低い評価をしている。中條がここで言う「実用性」とは「日本人英語学習者が高校卒業後に大学に入学し、グローバル化社会の中で生きるために必要とされる英語」であり、長谷川は「大学生活に必要とされる」という観点からの実践的コミュニケーション能力の分析をしたものである。いずれも、TOEIC、TOEFL、小説、雑誌、ニュースなどの語彙を中心にしている。そのため、前述の池田の分類した洗練文語体、一般文語体、洗練口語体に重点を置いた評価となっており、友人同士の日常会話で使用されるような語彙の比重は低く、口語英語の視点からの分析は不十分である。杉田陽出(2004)は「学校教育以外での英語の学習経験全般が英会話能力の向上に役立つ」という衝撃的な報告もしている。

西垣知佳子他(2010)は、高等学校の英語教科書の語彙のデータの分析により、いかに英語教科書で 사용되는語彙が時代を反映しているかを明らかにしている。しかしながら、この語彙の中には口語英語は見当たらなかった。

今回は、口語英語の語彙について、独自に調査分析を行った。調査では、高等学校の英語教科書で 사용되는語彙について、コンテキストまで含めて口語英語かどうかを判別し分析をした。調査に使用したのは、高等学校の英語教科書を主体に発行している文英堂の教科書で、『Powwow』(English Course I)、『Unicorn』(English Course II)、『Birdland』(Oral Communication I、II)である。

調査の結果、いずれの教科書においても口語英語は全く見られなかった。日常生活において大きな部分を占める口語英語が抜け落ちているということであり、ある意味では、語彙の収録状況はかなり偏っているとも言える。結局は、高等学校で指導する機会のなかった口語英語は、大学の英語教育において学生が高等学校までは未習ということを前提にして導入することに

なるのである。

3. 受験英語

留学生生活がスムーズに送れるようにとか、映画を字幕なしで理解できるようにということが高等学校の英語教育の目標であれば、口語英語の習得も促進されるであろうが、実際はそうではない。高等学校の現場では、学習指導要領を順守しつつ大学入試に合格するための英語教育を行っているのが現状である。あくまでも、大学受験に出てくる可能性の高い語彙を習得できるようにすることに主眼を置いている。一方で石川慎一郎(1998)は、5つの代表的な大学入試用単語集を比較検討し収録語彙に大きな違いがあることを明らかにしており、教材によっては当然、違いが生じてくるということもある。

拜田清(2011)は、大学入試でこれまで出題された英文が「示唆に富み、考えさせられるものが多く、教育的価値が十分にある」と述べている。試験問題の内容によっては大学自身の評価にもつながることもあり、入試問題作成者は、問題の英語のレベルだけではなく内容の是非も考慮しているというのは想像に難くない。当然、高尚な内容の英文には、口語英語の入り込む余地はほとんどない。

おそらく、大学受験を目指す多くの高校生は、口語英語が受験に出題されれば、それを学習する機会は増え、出題されなければ学習する機会は減るであろう。かつて、高等学校ではリスニング指導はさほど重視していなかったが、センター入試にリスニングが導入されたのをきっかけに高校生が積極的にリスニング能力向上を目指すようになり、高等学校の英語の授業も大きく変わったということは、その典型的な例である。

多くの受験生は大学の過去問題を解き、その傾向に沿って想定される問題を解けるよう努力をする。そういう前提に立てば、最も多くの受験生が受ける試験が、高校生の学習に一番大きな影響を与える可能性が高いと考えられる。そこで、2010年度のセンター入試問題と2010年度に全国の私立大学の一般入試で最も受験者が多かった早稲田大学商学部の入試問題の分析を試みた。分析の結果、いずれの入試問題でも、口語英語は全く見当たらなかった。もっとも、文部科学副大臣通知の「大学入学者選抜実施要項」において、「各大学が実施する学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう

十分留意しつつ、適切な方法により実施する」とあり、このような結果は予想の範囲内ではあった。

ただ、このような入試問題の傾向であれば、高校生は「割に合わない」口語英語を自ら学ぶはずもない。前章で明らかにしたように、口語英語は教科書にも出ておらず、現状では高校生はほとんど、あるいは全く口語英語を学ぶ機会はないようである。

拜田が「難関上位大学と中堅以下では二極化が進んでいる」と分析しているように、長期的な傾向としては、大学ごとに入試問題は変わってきており、難関大学の入試問題では今後において口語英語が出題される可能性も一部には残っている。もし、今後、難関大学で口語英語が出題されるようになれば、一部の高校生だけはそれを学ぶようになるかもしれない。

4. 大学での口語英語指導

大学の英語教育は、高等学校までの英語教育と比べると、自由な裁量で英語の指導を行うことが可能である。当然、口語英語を教材として取り入れることも可能である。ただし、旧国公立大学も含めて、現在では学生確保の観点から、学生に魅力的と映るような科目設定が命題となっており、その範囲内でのことである。言うまでもなく、「学生に魅力的」とは、単純に「面白い」とか「楽しい」という限定的な意味ではなく、例えば、「知的である」とか「将来役に立つ」とかさまざまな側面を持っている。

大学生の要望を例にとると、高橋妙子(2004)が行った「大学の英語の授業に対する要望・希望」に関する調査では、「英会話ができるように」というのが圧倒的に多く、回答した学生の2割を超えていた。宮原文夫他(1997)が日本、韓国、中国で行った本格的な調査においても、「日本における大学英語への失望理由」の7つの選択肢のうち、「聴く・話す技能が訓練されない」と回答したものが最も高く半数近くの47.3%にもなっており、オーラル関連の授業へ要求が強いことが分かる。ちなみに、次に失望理由として多かったのは、「高等学校と変わらない」(41.0%)である。ちなみに、このような回答の傾向は、中国人学生とは異なっているが、韓国人学生と近いものとなっている。

これらの結果は、受験英語からやっとなら解放された大学生の素朴な希望を反映しているのではなかろうか。大学生にはレベルの高く内容も濃い骨太の英文を読ませたいと考える多くの大学教員にとっては、大学英語

教育に街角の英会話教室と同等の期待しかされていない結果に愕然とするかもしれない。しかし見方を変えれば、「受験英語」中心だった高等学校までにはできなかった英会話を学ぶ経験を、大学でぜひやりたいという学生の要望の表れなのかもしれない。

前章までに明らかにしてきたように、口語英語は高等学校までに学ぶ機会の少ないものであり、大学新生にとっては新たな地平線で知的刺激もあり、心機一転「楽しく」英語学習に取り組むこともできる可能性もある。さらに、口語英語はさまざまな独特の文化を背景にしており、学生がそこで新たな発見があることも期待できる。

ところで最近、多くの大学で英語教育の一環として、大学、または学部、学科単位でのTOEIC関連の授業が展開されている。また、学生自身が、就職難という社会情勢の中で、採用試験で少しでも有利にしたいという消極的な理由でTOEICに向けた学習をしている場合もある。このような状況において、現在では、大学生が単語を習得する場合には、TOEICに頻出の単語を中心にしていく可能性が高まっていると考えられる。

石川慎一郎(2002)は、「TOEIC独自語の中には、一般的な語彙に比べると『堅い語・文語的な語・専門的な語・書き言葉で用いる語』が含まれていることが分かる」と指摘している。TOEICはビジネスに関連した表現がその特徴であるため、「TOEIC対策」の語彙習得に特化していると、結果的に英語圏の国々で大学生が日常会話で使用する口語表現までは手が回らなくなることが起こりうる。このような現状を考慮すると、大学では、TOEICとは関連が薄い英会話関連の授業の中で口語英語の指導を行うのが良いと思われる。科目の特性上、英会話であれば口語英語を教えることも自然であるし、実際に使える語彙を学ぶことで、学生のモチベーションも高まるように思われる。

久保田章(2010)は、英語の母語話者が使用する「生の英語」つまりは口語英語については、「より重要なことは、どのような時期にどのような方法で使用すれば生徒の英語習得に本当に最も効果があるか検討することである」と述べている。結論を言えば、「大学入学直後に「英会話関連の授業の中で体系的に学ぶ」ことが望ましいのではなからうか。高等学校までは、学習指導要領の縛りがあり、大学入試を控えているという事情から、本格的に口語英語を学ぶことは現実的には難しい。とは言え、そのまま学ばないで済ませるということは、さらに大きな問題である。大学入学直

後であれば、口語英語を学ぶということが、学生にとっても新たな視点での英語学習ということで刺激になり、英語学習の動機付けに繋がると考えられる。ただし、ただテキストや会話に登場した口語英語を場当たりの学的に学ぶのではなく、体系的に学ぶことが必要である。例えば、日常的によく使われている語彙や、友人との会話では使用できても目上の人には使っていない語彙、あるいはよく耳にはするが使用しない方がよい語彙などのように、口語についてはその幅が広いので、使い方まできちんと指導することが肝要である。さらに欲を言えば、映画やドラマなどのオーセンティックな教材を活用すれば、現実の場面での使用方法(あるいは使用してはいけない事情)についてもより理解が進むであろう。

ただ気をつけなければならないのは、学生の利便的な満足度を上げるための口語英語の導入にならないということである。大津由紀雄(2009)は、『コミュニケーション』という得体の知れない怪物の横行によって、堅固な英語運用能力の育成という、従来、大学英語教育が果たしてきた役割は『実用英語』『生きた英語』『役に立つ英語』『文法抜きの英語学習』といった飾り文句つきの代物によってかなりの程度、凌駕されつつある」と危機感を募らせている。口語英語は語法違反やスラングを含んでおり、そこで使われる構文や語彙には自ずと学習教材としての限界がある。口語英語の取り組みは、あくまでもそれまでの十分な学習による土台があつてのものでなければならないのである。

5 まとめ

これまで論じてきたように、高等学校までの学校教育では、口語英語の取り組みは十分になされてこなかった。諸般の事情を鑑みて、当然の結果という印象もある。このような中で重要なことは、この現状を放置せず、せめて大学の英語教育では、口語英語の指導をきちんと行っていくように努めることである。大学の英語教育に関わる教員は、自分自身が英語に慣れているために、新入生が簡単な口語表現さえ理解できない状態にあることに気付かない恐れがある。ゆえに教員は、彼らが高等学校までに口語英語をほとんど学ぶ機会がなかったという認識を持つことが、最低でも必要である。

口語文法について、小林は3つの改革案を出してい

る。1. 高校のオーラルコミュニケーションの授業で口語文法を教える。2. 大学入試、英検、TOEIC、TOEFLに口語文法を出題する。3. 口語文法に精通したかつ運用能力のある教員を養成する。このうちの1については、文部科学省の決断のみで実現可能である。2と3については、それぞれの組織の判断に委ねられている。本論では、現実的な問題として、大学での口語英語の指導を充実させるのが望ましいという結論である。

謝 辞

本研究は西南女学院大学共同研究費の助成を得て行われた。

【参考文献】

- 池田拓朗 (1992) 『英語文体論』 研究社出版 pp.1-6
- 石川慎一郎 (1998) 「英語コミュニケーションと語彙：大学入試用単語集の有効性の検証」『言語文化学会論集』 11 言語文化学会 p.5
- 石川慎一郎 (2002) 「TOEICの語彙—その特徴とレベル—」『言語文化学会論集』 19 言語文化学会 p.209
- 大津由紀雄編著 (2009) 「『戦略構想』、『小学校英語』、『TOEIC』—あるいは、ここが正念場の英語教育」『危機に立つ日本の英語教育』 慶應義塾大学出版会 p.25
- 川又正之 (2012) 「学習指導要領における語彙の取扱いについての考察—新学習指導要領を中心として」『敬和学園大学研究紀要』 第21号 敬和学園大学人文学部 p.115
- 久保田章 (2010) 『英語科教育法』 大修館 p.203
- 小林敏彦 (2009) 「洋画の談話に見られる口語文法の構築と類型化」『小樽商科大学人文研究』 小樽商科大学 p.101, p.104, pp.111-112
- 斉藤兆史 (2009) 「日本の英語教育界に学問の良識を取り戻せ」大津由紀雄編 『危機に立つ日本の英語教育』 慶應義塾大学出版会
- 佐藤学 (2009) 「言語リテラシー教育の政策とイデオロギー」大津由紀雄編 『危機に立つ日本の英語教育』 慶應義塾大学出版会
- 杉田陽出 (2004) 「英語の学習経験が日本人の英会話力に及ぼす効果：JGSS-2002のデータから」『JGSS研究論文』 3 大阪商業大学 p.55
- 高橋妙子 (2004) 「学生たちは授業に何を期待しているか」『英語教育』 Vol. 53 大修館 pp.28-29
- 高梨芳郎 (2009) 『データで読む英語教育の常識』 研究社 p.87
- 中條清美、吉森智大、長谷川修治、西垣知佳子、山崎淳史 (2007) 「高等学校英語教科書の語彙」『日本大学生産工学部研究報告』 第40巻 日本大学生産工学部
- 中條清美、西垣知佳子、長谷川修治、内山将夫 (2008) 「『ゆとり教育』時代の高校教科書語彙を考える—1980年代と2000年代の高校英語教科書語彙の比較分析からの考察—」『英語コーパス研究』 第15号 英語コーパス学会 p.60
- 西垣知佳子、中條清美、長谷川修治 (2010) 「特徴語に見る高校英語教科書語彙の時代的变化—1980年代と2000年代教科書の比較—」『英語表現研究』 第27号 日本英語表現学会
- 永原和夫 (1991) 「高等学校英語教科書の語彙比較：Unicorn, Crown, Creativeについて」『人文研究』 小樽商科大学
- 拝田清 (2011) 「入試問題は今」『新英語教育』 2011年9月号 三友社出版 pp.8-9
- 長谷川修治、中條清美、西垣知佳子 (2008) 「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」『日本大学生産工学部研究報告』 第41巻 日本大学生産工学部 p.51
- 宮原文夫、名本幹雄、山中秀三、村上隆太、木下正義、山本廣基 (1997) 『このままでよいか大学英語教育 中・韓・日3か国の大学生の英語学力と英語学習実態』 松柏社 pp.70-71
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領解説 外国語英語編』 p.30

The Introduction of Colloquial English as a Method of Teaching English

Harumi Yahiro*, Dennis Woolbright**

<Abstract>

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology stresses the importance of the ability of communication in high school English education. All high schools naturally try to follow the policy. In analyzing English textbooks for Japanese high school students and entrance examinations for universities, we realized that few cases of colloquial English are included. Thus high school students have little chance to learn the vocabulary which native speakers usually use in their daily life.

University students have a lot of opportunities to study abroad. If they learn colloquial English beforehand, they can live a more comfortable life there. This paper takes the hypothesis that Japanese students need to learn colloquial English systematically in the classroom just after entering the university.

Keywords: English education, colloquial English, vocabulary, communication, high school

* Professor in the Department of Tourism, Faculty of Humanities, Seinan Jo Gakuin University

** Professor in the Department of English, Faculty of Humanities, Seinan Jo Gakuin University